

ト短調交響曲

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

1773年10月5日、交響曲第24番変ロ長調 KV 182 (173dA) の作曲からわずか2日後に交響曲第25番ト短調 KV 183 (173dB) が作曲される。これまでのイタリア風序曲とは打って変わり、4つの楽章からなるかなり大規模な交響曲である。モーツァルトが初めて作曲した短調の交響曲で、そこには「シュトゥルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）」の精神が宿る。8分の3拍子のロンドとは全く異なる壮大なフィナーレ。3度目のヴィーン旅行から帰って来たばかりのモーツァルトに何があったのであろうか。

モーツァルトは人生の3分の1を旅で過ごした。彼は、旅先で出会った音楽家たちからその音楽や文化を吸収し、それを自分の血や肉とした。彼は、1778年9月11日、旅先のパリからザルツブルクに住む父に宛てた手紙で、

「ぼくは断言しますが、旅をしないひとは、(少なくとも芸術や学問にたずさわるひとたちでは) まったく哀れな人間です！ (中略) 凡庸な才能の人間は、旅をしようとしまいと、常に凡庸なままです。——でも、優れた才能のひとは、いつも同じ場所にいれば、だめになります。

と、述べている。1764年4月23日、8歳のモーツァルトは家族とともにロンドンに到着した。そこでヨハン・セバスティアン・バッハ（大バッハ）の末っ子（第11子）、ヨハン・クリスティアン・バッハと出会う。ヨハン・クリスティアン・バッハはカール・フリードリヒ・アーベルと1764年2月から約20年に渡って、定期的な演奏会、いわゆるバッハ＝アーベル・コンサートを開催した。この演奏会を通して、モーツァルトは彼らの交響曲や協奏曲、室内楽を知ることになった。当時のヨハン・クリスティアン・バッハとモーツァルトの関係を示すものとして、法律家兼自然科学者であったデインズ・バリントンが、1765年6月にモーツァルトの学才をテストしたときの模様を仔細に記述した報告書がある。そこには、次のように記載されている。

著名な作曲家でありますバッハが、フーガを弾きはじめ、これを突然中断いたしますと、幼いモーツァルトがただちにそれを取り上げ、まことに見事な仕方で仕上げました。

また、フリードリヒ・メルキオール・フォン・グリム男爵は、1766年7月、「文芸通信」に次のように報告している。

ロンドンでは、バッハが彼を膝に抱き、二人はこうして暗譜で、交互に二時間もたてつづけに、国王および王妃の御前で、同じクラヴサンで演奏したものであります。

ロンドン滞在中、父のレーオポルトは高熱と疼痛を伴う重い病気にかかったため、子供たちへの音楽の指導は中断されたが、モーツァルトはバッハから彼がロンドンで確立した新しい形式の交響曲作曲の手ほどきを受ける。そうして生まれたのが、交響曲第1番変ホ長調 KV 16 と交響曲第4番ニ長調 KV 19 である。最初の交響曲が作曲された経緯を、後年、姉のマリア・アンナ（愛称ナンネルル）が一般音楽新聞（ライプツィヒ、1800年1月20日号）で伝えている。

ロンドンで、私の父があやうく死にかけるほどの病気にかかったとき、私たちはクラヴィーアに触れることは許されませんでした。そこで勉強のために、モーツァルトはあらゆる楽器——とくにトランペットとティンパニを伴う最初の交響曲を作曲しました。私は彼のそばに坐って、この曲を書き写さねばなりません。彼が作曲し、私が写している間、彼は私にこう言ったものでした。《ヴァルトホルンにぴったりのことができるようにぼくに注意してね！》

本日演奏するヨハン・クリスティアン・バッハ作曲の交響曲ト短調 op.6 Nr.6 は、1770年頃にアムステルダムで「6つの交響曲」作品6の6番目としてその印刷パート譜が出版された。作品6の1番目の交響曲が1764年の作曲であることが判明していることから、このト短調交響曲も、おそらくは、モーツァルトがロンドン滞在中に作曲されたものであると思われる。カルル・ド・ニは、モーツァルトが1764年にロンドン郊外のチェルシーで残したスケッチ帳には、ト短調の交響曲の断片 KV 15p があり、そこにはすでに《小ト短調》交響曲 KV 183(173dB)のあらゆる特徴が見出されていると指摘している。モーツァルトの創作とヨハン・クリスティアン・バッハのト短調交響曲との関係を考える上で大変興味深い。

コペンハーゲンで発見されたこの曲の筆写パート譜には、オーボエのパート譜と全く同じフラウト・トラヴェルソ（バロック・フルート）の楽譜と、バスのパート譜と同じファゴットの楽譜が残されている。オーボエの代わりにフルートでも演奏されていたことを示すとともに、ホルンとオーボエが休み弦楽合奏になる緩徐楽章についてもファゴットが使われたことを示している。これは、後述するハイドンやモーツァルトのファゴットの使い方とは異なっている。

ヨハン・クリスティアン・バッハは、1782年1月1日に46歳で亡くなった。当時、ヴィーンに住んでいたモーツァルトは、4月10日に故郷ザルツブルクの父に宛てて次のような手紙を送っている。モーツァルトがいかにヨハン・クリスティアン・バッハを敬愛していたかがわかる。

ぼくはいま、バッハのフーガを集めています。ゼバスティアンの作品だけでなく、エマーヌエルやフリーデマン・バッハのも含めてです。——それからヘンデルのも。——（中略）——イギリスのバッハが亡くなったことはもう御存知ですね？——音楽界にとってなんという損失でしょう！

1773年7月14日、モーツァルトは父と共にヴィーンに向けてザルツブルクを出発し、20日頃に到着した。ザルツブルクの司教、ヒエローニムス・コロレードが7月31日にヴィーンに到着していることから、おそらく、コロレードの命により随行することになったのであろう。モーツァルトは1772年8月21日に無給から有給（年棒はわずか150グルデン）のコンツェルトマイスターに昇格しており、司教が食事をするときにはバックグラウンドミュージックを演奏する責務があった。コンツェルトマイスターといっても、料理人や門番と同じ使用人で、楽士たちは、台所で料理人たちや召使たちと食事をするような身分であった。父レーオポルトは各地で息子のためによりよい待遇の就職先を見つけようと奔走していた。今回もマリーア・テレジア皇太后に拝謁したが、実は結ばなかった。レーオポルトは、8月12日、落胆した様子をザルツブルクで夫と息子を待つ妻に宛てて書いている。

皇太后は私たちにとても好意をお持ちでした。でもそれですべてでした。帰ってからお前に直接

話すことにしましょう。なんでもみんな書くわけにはいかないから。

イタリアで発祥した交響曲はヨーロッパ各国で独自の進化を遂げていた。バロック時代は終焉を告げ、新しい時代が幕を開けていた。ウィーンではメヌエットを加えた4楽章の交響曲が作曲され、マンハイムでは新しい楽派が、ロンドンではバッハとアーベルが改革を進めていた。これまでの交響曲は、王侯の広間で心地よい音楽を提供するといった位置づけであったが、内に秘めた苦悩や情熱といった感情を自己表現する「芸術」に改革が進められていた。ウィーンでそれを目の当たりにしたモーツァルトはかなり衝撃を受けたに違いない。ロビンス・ランドンは、ヤン・ラ・ルーと18世紀の交響曲7000曲以上を調査した上で、このころのウィーン楽派による改革の特徴を次のように述べている。

1. 短調の使用により、「シュトゥルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）」の精神が端的に反映されている。
2. 対位法技術の頻繁な使用により、主題動機、和声構造など、その至る所に緊張感があふれている。
3. シンコペーションが非常に重要な構成要素になっている。
4. フィナーレに創意が一層凝らされ、より念入りに展開される。4分の2拍子や8分の3拍子よりも、アラ・ブレーベ（2分の2拍子）や4分の4拍子が好まれる。
5. 広い音程に基づく主題の動機が使われる。
6. バスの8分音符にヴァイオリンの16分音符の刻みがかぶさる。
7. 主題はしばしばユニゾンで奏される。

モーツァルトが3度目に訪れたウィーンで活躍していたのはヨーハン・バプティスト・ヴァンハルである。ヴァンハルは、1739年5月12日にボヘミアのネハニーツェで生まれ、1760～1761年頃、ウィーンに来てカール・ディッターズ（後のフォン・ディッターズドルフ）に作曲を師事する。1769年5月から1770年9月までイタリアで過ごした後、ウィーンに戻った。その後、クロアチアのバラジュディンなどにも移り住んだが、1785年以降はウィーンに定住し、作曲家、音楽家として活躍した。ヴァンハルの名声はウィーンに留まらず、多くの筆写譜や出版譜の形でヨーロッパ中に広まっていた。1768年ウィーンの新聞に「最高のマイスター」としてハイドン、クリスティアン・バッハ、ヴァーゲンザイルとともにヴァンハルの名前が挙げられている。晩年は精神疾患を患って、1813年8月20日、74歳で亡くなった。

本日演奏するヨーハン・バプティスト・ヴァンハル作曲の交響曲ト短調 **Bryan g1** は、1771年のブライトコプフ社のカタログに現れる。正確な作曲年は不明であるが、ポール・ブライアンは残された楽譜とその作風から1767～1768年の作曲と推定している。全楽章を通して上述した「ウィーン楽派による改革の特徴」が認められる。速い楽章で聞かれる内声部の途切れることのないシンコペーション。広い音程の主題、バスの8分音符に重ねられたヴァイオリンの16分音符の刻み。是非演奏会で確かめていただきたい。

ヴァンハルがウィーンにやってきた1761年、フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは、ウィーンの南南東45キロに位置するアイゼンシュタットのエステルハージ公爵家の副楽長に就任した。1766年3月には、楽長に昇進。その頃、公爵が不在の間は、「アイゼンシュタットの高官室において、

毎週、火曜日と木曜日の二回、午後 2 時から 4 時まで、全音楽家によって演奏会（アカデミー）を催すこと」が義務付けられていた。

ハイドンは伝記作者グリーンガーに次のように語ったとされる。

私は世間から隔絶され、私の近くには私の行く手をまごつかせたり惑わしたりするような人はおらず、したがって私は独創的にならざるを得ませんでした。

エステルハージ家は、ハンガリーの貴族を代表する存在だったが、その地位はハンガリーにおけるハプスブルク家の支配を率先して認めたことによって得られたものであり、ウィーンでは、彼らは、所詮「ハンガリーの」貴族でしかなかった。つまり、エステルハージ家は、地理的にも精神的にも、ハンガリーのナショナリストとウィーンの宮廷の間にあって、その均衡の上に立っていた。世間から隔絶されていたのは、ウィーンの芸術的サークルから排除されていたという文化的な意味以上にハイドンを仕えていた宮廷が政治的、社会的に孤立していたことと関連していたと、伊東は指摘している。

ハイドンはアイゼンシュタットのエステルハージの家で副楽長の地位に就いた 1761 年から約 20 年間というもの、彼は、アイゼンシュタットあるいはエステルハーザの寂寥の地で生活し、必然的に独創的にならざるを得なかった。そのような環境の中で生まれたのが、フランツ・ヨーゼフ・ハイドン作曲の交響曲第 39 番ト短調 **Hob.I:39** である。作曲されたのはゲットヴァイク修道院に残されている 1770 年の日付をもつ筆写楽譜が作られた 2 年前、すなわち 1768 年と推定されている。従って、ヴァンハルとハイドンは全く同じ頃に 4 本のホルンを持つト短調の交響曲を作曲していたことになる。この時期のエステルハージ家のオーケストラの編成は、ヴァイオリン 4~6、ヴィオラ 2、チェロ 1、コントラバス 2、フルート 1、オーボエ 2、ファゴット 2、ホルン 4 であった。ロビンズ・ランドンは、必要に応じて、教会音楽家から弦楽器奏者、軍楽隊からトランペットと打楽器奏者、さらに街の音楽家が随時加えられたのではないかと考えている。譜表に記入されていない通奏低音楽器としてのファゴットとチェンバロの参加は、ハイドン自身の演奏上の注意書きにもあり、当時の習慣であった。特に緩徐楽章がしばしば二声で構成されていることから（交響曲第 39 番も例外ではない）、チェンバロは不可欠であった。ファゴットはしばしば独立したパートとして譜表に加えられることがあり（交響曲第 39 番以前にはわずか 3 曲であるが、認められる）、ファゴットが独奏する部分と緩徐楽章を除いて常にバスのパートをなぞっていたことがわかる。

1780 年になって、当時支配していたエステルハージ公は、毎冬、しばらくの期間、彼のオーケストラと共にウィーンに来る習慣を取り入れた。この時以来はじめてハイドンはここを訪れる客となり、モーツァルト一家と知り合うことになる。1782 年 12 月 31 日、モーツァルトは 6 曲からなる弦楽四重奏曲の作曲を始めた。この一連の作品に 2 年越しで取り組み、「まさに、長い辛苦の成果（アルターリアから出版された初版の献辞）」として 1785 年 1 月 14 日に完成した。モーツァルトは 1 月 15 日と 2 月 12 日にハイドンを自宅に招き、これをハイドンに献呈した。ハイドンはそこで大きな感銘を受け、同席したモーツァルトの父レーオポルトに最大級の賛辞を述べた。2 月 16 日、レーオポルトがザルツブルクの娘に宛てた手紙に次のようにある。

土曜日の晩には、ヨーゼフ・ハイドンさんと、それに二人のティンティ男爵が私たちのところを

訪ねてこられ、新作の四重奏曲が演奏されました。でも、すでにある他の三曲につけ加えられた新しい三曲だけが演奏されたのです。これらの曲はたしかにちょっとばかり軽いものですが、構成は素晴らしいものです。ハイドンさんは私にこう言われました。「誠実な人間として神の御前に誓って申し上げますが、御子息は、私が名実ともども知っているもっとも偉大な作曲家です。様式感に加えて、この上なく幅広い作曲上の知識をお持ちです。」

1785年9月1日、いわゆる「ハイドン・セット」がアルターリアから出版された。そこには以下のような献辞が記されている。

わが親愛な友ハイドンに

自分の息子たちを広い世に送り出そうと決心した父親は、当節きわめて高名であり、しかも、幸運にも最上の友となった方の庇護と指導のもとに、彼らを委ねるべきであると考えました。(中略) どうぞ彼らを優しく迎えてくださり、彼らの父ともなり、師ともなり、友ともなってください！ いまよりのち、私の彼らに対する父なる権利をあなたにお譲りいたします。したがって、父親の偏愛の目で見えなかったかもしれない彼らの欠点を寛大に見守ってくださり、それにもかかわらず、あなたが寄せてくださる心広い友情をこんなにも大切に思う私に対して、いつまでもその友情を持ち続けてくださるよう、切にお願いいたします。

最愛の友へ

心よりあなたのこの上なく誠実な友

W.A.モーツァルト

1786年5月1日、ブルク劇場での『フィガロの結婚』の初演の際、バジリオとドン・クルーツィオの二役を演じたアイルランド人の歌手マイケル・ケリーが以下のように伝えている。ケリーは、フィガロの結婚の初演でスザンナ役を演じたナンシー・ストレースと親しかった。ナンシー・ストレースは、当時、兄で作曲家のシュテファン・ストレースとウィーンに住んでいた。

ストレースの家ではちよくちよく音楽の夕べが催され、ハイドンが第一ヴァイオリン、ディッターズドルフが第二ヴァイオリン、モーツァルトがヴィオラ、ヴァンハルがチェロを受け持った。

エルンスト・フリッツ・シュミットは、1780年代の初めに書かれた1枚の自筆譜（ピアノのカデンツ）の裏側に書き記した数小節の楽譜が、ハイドンの三つの交響曲すなわち、第47番、第62番、第75番の冒頭主題であることを明らかにした。フリードリッヒ・ブルーメは、これらの交響曲が作曲された年からこのメモが書かれたのは、1782年または1783年より前ではないとしている。ブルーメは、1782年から1783年に作曲されたハフナー交響曲とリンツ交響曲を作曲するにあたって、モーツァルトがハイドンの交響曲を研究していたのではないかと推察している。ハイドンは1809年5月31日、77歳で亡くなった。葬儀にはモーツァルトのレクイエムが演奏された。

1783年1月4日、ウィーンに住むモーツァルトはザルツブルクの父に4つの交響曲のパート譜をできるだけ早く送るよう頼んでいる。

ウィーンで僕が書いたこないだのハフナーの音楽については、原譜でも写譜でも、どちらでも送ってくださってかまいません。だって、いずれぼくは音楽会のためになんども写譜をさせなくてはならないでしょうから。——次にあげるシンフォニーも、できるだけ早くほしいのです。——

手紙には、「次にあげるシンフォニー」として4つの交響曲の冒頭4～5小節が記されている。これらは、セレナードニ長調 KV 204 (213a)、交響曲第29番イ長調 KV 201 (186a)、交響曲第24番変ロ長調 KV 182 (173dA)、交響曲第25番ト短調 KV 183 (173dB)である。

モーツァルトの交響曲第25番ト短調 KV 183 (173dB)は、1773年10月5日に完成した。しかし、自筆譜に記入された日付は、何者かの手によって消されている。モーツァルトは、1783年3月頃に行われた一連の音楽会で「新曲」の交響曲を披露する必要があった。そのため、10年前に作曲した交響曲を新曲のように見せかけるために、自筆譜にあった日付を本人自身が消したのではないだろうか。交響曲第37番ニ長調 KV 444 (425a+Anh.A53)は、ハイドンの弟であるミヒャエル・ハイドンの交響曲 P.16 (1783年5月作曲)にモーツァルトがアダージョの序奏を追加しただけのものであるが、これも1784年2月～4月に行われた音楽会の急場を凌ぐために行われたと考えられている。

モーツァルトの自筆譜には、ファゴットは緩徐楽章とメヌエットのトリオにしか使用されていない。交響曲第25番ト短調 KV 183 (173dB)以前に作曲された交響曲でファゴットパートがある3つの交響曲を見てみると、交響曲第12番ト長調 KV 110(75b)は、緩徐楽章にだけ独立したファゴットパートを作曲し、他の楽章にはファゴットの指定はない。真作ではない可能性もある交響曲へ長調 KV 76(42a)は、緩徐楽章は完全に独立したファゴットパートが書かれ、メヌエットは、主部・トリオともバスパートと同じ。第一楽章とフィナーレは、基本的にはバスパートをなぞっているが、オーボエ、ホルンとともに和音を構成する部分もある。交響曲第26番変ホ長調 KV 184(166a)では、第一楽章は、フルート、オーボエと和音を構成するところ以外は、バスのパートをなぞるだけだが、緩徐楽章、フィナーレは、管楽器の一員として作曲されている。

ハイドンの場合でもそうだったように、速い楽章ではファゴットをバスに重ねることが当時の習慣であったことから考えて、ファゴットの指定がない楽章においても、ファゴットは、バスと同じパート譜で演奏するべきだと考える。J.A.アンドレの1833年の手書きのカタログによると、「本物の写譜から起こしたモーツァルト作曲のパート譜、VI.177——交響曲、ヴァイオリン2、ヴィオラ2、バス、オーボエ2、ファゴット2、ト調のホルン2、変ロのホルン2」とある。残念ながら、これが現存していないので、ファゴットが実際の演奏でどのように扱われたのかわからないが、大変興味深い別の文献（アロイス・フックスの総譜）がプラハ大学に保管されている。この総譜には、両端楽章にもファゴットのパートが書き込まれているが、バスパートとは少し異なっている。第1楽章の静寂な場面で休ませ（弱音指定でも動きのある個所はバスパートと同じ音が書かれている）、フィナーレでは弦楽合奏になる個所は休ませている（ただし、冒頭の弦楽器のユニゾンにはファゴットに参加させている）。メヌエットは管楽合奏になるトリオのみで、主部は休ませている。この総譜はモーツァルトが意図したものなのか当時の習慣だったのか、解釈が難しいが、私には、メヌエットの主部で休ませる必然性がわからない。トリオでファゴットをはじめて登場させることが、それほど効果的であろうか。フィナーレの再現部の弦楽器のユニゾンではファゴットを休ませているのに冒頭では重ねている理由もわからない。本日の演奏では、メヌエットの主部はバスにファゴットを重ね、フィナーレの冒頭は休ませしてみようと考えている。

ヴァンハル、ハイドン、モーツァルトのト短調交響曲に共通する一つの点としてG(ト音)管のホルン2本と並行調の基音となるB(変ロ音)管のホルン2本を使用している点である。モーツァルト

はこれまでも4本のホルンを使った交響曲を作曲していた。交響曲第18番へ長調KV 130、交響曲第19番変ホ長調KV 132がそうである。前者は、2本のF管（へ音）ホルンと属調の基音となる高いC管（ハ音）ホルン2本が、後者には、2本の低いEs（変ホ音）管ホルンと半分の長さの高いEs管ホルンが2本使われている。ハイドンも、交響曲第13番ニ長調、第31番ニ長調、第72番ニ長調に4本のホルンを使用しているが、こちらは4本ともD（ニ音）管のホルンである。一方、ヴァンハルは短調の交響曲に様々な組み合わせのホルンを使用している。1764～1767年に作曲した交響曲ホ短調e1に2本のE管（ホ音）ホルンと2本のG（ト音）管ホルンを、1767～1768年に作曲した交響曲ニ短調d1に、2本のD管ホルンと2本のF管ホルンを、1769～1771年に作曲した交響曲イ短調a2に、2本のA（イ音）管ホルンと2本のC管ホルンを、1773年～1774年に作曲した交響曲ニ短調d2に、2本のD管ホルンと2本のF管ホルンに加えて1本のA管ホルンを使用している。1771年～1772年に作曲した交響曲ホ短調e2では、1本のE管ホルンと1本のG管ホルンを、1773年～1774年に作曲した交響曲イ短調a1では、A管ホルン、C管ホルン、E管ホルンを1本ずつ使用しているが、後年、モーツァルトが交響曲第40番ト短調でG管ホルンとB管ホルンを1本ずつ使用した例の先駆けになっている。

当時のホルンは自然倍音（ド・ド・ソ・ド・ミ・ソ・シ♭・ド・レ・ミ・ファ#・ソ・・・）しか出せなかったため、ト短調で始められた第一主題から変ホ長調の第二主題に移るときに、調性の異なる一対のホルンがあると常に和声を支えることができる。ヴァンハル、ハイドンはまさにそのような使い方である。しかし、モーツァルト作曲の交響曲第25番ト短調KV 183(173dB)のホルンの使い方は、これまでのモーツァルトともヴァンハルやハイドンともまったく異なる。当時のホルンは自然倍音しか出せなかったと述べた。すなわち、G管のホルンで、ソ・シ・レ・ソ・ラ・シ・ドの音を、B管のホルンで、シ♭・レ・ファ・シ♭・ド・レ・ミ♭の音を演奏していた。モーツァルトはこれを巧みに組み合わせ、フィナーレでは、G管のホルンで、『ソ・レ・●—・ラ・ソ・●・ラ・ソ・ラ・レ・ド—・●・ラ・ド・●・ラ・ソ・●・●—・レ・ド・ラ・レ—・●・●—・ラ・レ・ソー』と演奏させ、B管のホルンで、『●・●・シ♭—・●・●・シ♭・●・●・●・レ・ド—・●・●・ド・シ♭・●・●・シ♭・ミ♭—・レ・ド・●・レ—・ド・シ♭—・●・レ・●—』と演奏させることで、『ソ・レ・シ♭—・ラ・ソ・シ♭・ラ・ソ・ラ・レ・ド—・(シ♭)・ラ・ド・シ♭・ラ・ソ・シ♭・ミ♭—・レ・ド・ラ・レ—・ド・シ♭—・ラ・レ・ソー』という旋律が聞こえるようにしている。（●は休符、—は長音）

本日の演奏会は、モーツァルトのト短調交響曲に先駆けて作曲された、3つのト短調交響曲を取り上げた。これらの曲が存在しなかったら、モーツァルトのト短調交響曲は生まれなかったかもしれない。しかし、交響曲改革の波の中で、この名曲は生まれるべくして生まれてきた、と考えた方がよさそうである。ブルーメもランドンも次のように指摘している。

多くの主題は街々に流れる共有財であり、共通に使用した一対の音あるいは旋律の動きが問題なのではなく、彼らがそこから作ったものが問題である。誰がいつ影響したのかは、個々には全く例証できず、基本的に些細なことでもある。（ブルーメ）

18世紀の作曲家たちの主題を比較して、クリスティアン・バッハのしかじかの主題がモーツァルトのしかじかの交響曲の基になっているといった、危険な遊びはもうやめようではないか。モーツァルトは充分伶俐だったから、ヴァンハルやハイドンの主題の意識的な借用など絶対にするはず

がない。(ランドン)

リヨンのレストランで出されるビフテキに付け合わせられたニンジンのグラッセが赤坂の料亭の人参の煮物とよく似ていると言っているのとなんら変わらない。素材の良し悪しはあるとしても、シェフによって料理は変わる。音楽も同じこと。お互い影響を及ぼしあいながら切磋琢磨して、より良いものに進化していったのであろう。

(2012年3月19日)

【参考文献】

1. Richard Platt: Johann Christian Bach Sinfonie in g-moll, Op.6 Nr.6 Ernst Eulenburg Ltd. (1974)
2. Fritz Stein: Johann Christian Bach Sinfonie g-moll, Op.6 Nr.6 Breitkopf & Härtel (1959)
3. H. C. Robbins Landon: Johann Baptist Vanhal Sinfonia g-moll, Doblinger (1964)
4. H. C. Robbins Landon: Joseph Haydn Sinfonia No.39 g-moll, Doblinger (1963)
5. Paul Bryan: Johann Wanhal, Viennese Symphonist His Life and His Musical Environment, Pendragon Press (1997)
6. Hermann Beck: Wolfgang Amadeus Mozart Sinfonie in g KV 183, Barenreiter Verlag (1960)
7. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage (1983)
8. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989)
9. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989)
10. H.C.ロビンス・ランドン (笠原潔 訳): モーツァルトとロマン的危機——《小ト短調交響曲 K183(173dB)の知られざる先駆者たち》(海老沢敏編, モーツァルト探究), 中央公論社(1992)
11. エルンスト・フリッツ・シュミット (吉田泰輔 訳): モーツァルトとハイドン (モーツァルト叢書2「モーツァルトの創作の世界」), 音楽之友社 (1973)
12. フリードリヒ・ブルーメ (吉田泰輔 訳): モーツァルトとハイドン (モーツァルト叢書11「モーツァルトと大作曲家たち」), 音楽之友社 (1977)
13. 中野博詞: ハイドン交響曲, 春秋社 (2002)
14. 伊東信宏: ハイドンのエステルハージ・ソナタを読む, 春秋社(2003)
15. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1976)
16. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980)
17. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集IV, 白水社 (1990)
18. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995)
19. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001)

【Programm】

J. C. バッハ

Johann Christian Bach (1735 - 1782)

交響曲ト短調 op. 6/6 (1764?)

Sinfonia g-moll op. 6/6

- I. Allegro
- II. Andante più tosto adagio
- III. Allegro molto

J. B. ヴァンハル

Johann Baptist Vanhal (1739 - 1813)

交響曲ト短調 Bryan g1 (1767~1768)

Sinfonia g-moll Bryan g1

- I. Allegro moderato
- II. Andante cantabile
- III. Menuetto mit Trio
- IV. Finale: Allegro

----- 休憩 Pause -----

F. J. ハイドン

Franz Joseph Haydn (1732 - 1809)

交響曲第39番ト短調 Hob.I :39 (1768)

Sinfonia Nr.39 g-moll Hob. I:39

- I. Allegro assai
- II. Andante
- III. Menuet mit Trio
- IV. Finale: Allegro di molto

W. A. モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756 - 1791)

交響曲第25番ト短調 KV 183 (173dB) (1773)

Sinfonie Nr. 25 g-moll KV 183 (173dB)

- I. Allegro con brio
- II. Andante
- III. Menuetto mit Trio
- IV. Allegro